

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

意見番号	内容	御意見の概要	件数	事務局対応
1	1.はじめに (1)ビジョン策定の目的	5行目文頭直後「長年にわたり」を、4行目「本公園の誕生は、」の直後に移し、6行目「長年に渡る」を削る修正をご検討願います。原文が重複的な表現に感じるため、提案の修正であれば元の文意と変わらないものと思料します。		御意見のとおり修正します。
2	図1: 日高山脈襟裳十勝国立公園公園区域図	凡例にある「特別保護地域」は「特別保護地区」の間違いではないでしょうか。ご確認ください。		御意見のとおり修正します。
3	1.はじめに (3)日高山脈襟裳十勝国立公園の概要	日高山脈の原生的な自然は、森林だけでなく森林限界を超えた高山の領域にも認められ、それとともに、本公園の自然是森林だけではなく、高山に多くの特徴が認められます。それ故、パブコメ版の「原生的な自然林生態系」は、日高山脈の自然を正しく捉えない、間違った表現になります。したがって、ここは「山頂・山稜に成立する高山植生と山腹から山麓を広く被う自然林から構成される、原生的な自然生態系」と修正すべきです。自然林の広がりは日高山脈の一つの大きな特徴ですが、ここでは「林」を外すべきです。		御意見を踏まえ、「自然環境」に修正します。
4	2.価値・魅力	日高山脈の成り立ちとして、プレートの衝突が記述されていますが、日高山脈全域の地質の特徴がほとんど記されていません、その上で「世界的に見ても珍しい」と記されていますので、何が珍しいのか理解できません。「その成り立ちは、(中略)新鮮なかんらん岩が見られます。」の部分を以下のように少し具体的に記述してみてはいかがでしょうか。 「その成り立ちは、北海道付近において2つのプレートの衝突が進行し、東側のプレートの地殻がめぐれ上がるよう突き上げられたことに由来し、本来は地下深くにある地質の断面が地表に連続的に現れています。つまり、山脈を西から東へ横断すると、西側の地殻最下部から東側の地殻上部までの岩石を現在の地表で連続的に観察できる世界的にも珍しい場所です。また、ユネスコ世界ジオパーク		御意見を踏まえ、「つまり」以下の文について、以下のとおり修正します。 「つまり、山脈を西から東へ横断すると、プレートの地殻最下部から地殻上部までの岩石を現在の地表で連続的に観察できる世界的に見ても珍しい場所です。」

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		一ヶにも認定されているアポイ岳(標高 810m)周辺には、地殻よりも深いマントルの様子を知ができる新鮮なかんらん岩が見られます。		
5	2. 価値・魅力	表記ゆれをかな表現に訂正。他箇所は「とともに」とあるが、この箇所だけ「と共に」と漢字表記となっています。		御意見のとおり修正します。
6	2. 価値・魅力	「広大な山域一帯には自然林が広がり、国指定天然記念物「沙流川源流原始林」や我が国最大規模のまとまりをもつ原生流域などがあります。」は、不正確な表現ですので、以下のような修正を望みます。「広大な山域は、国指定天然記念物「沙流川源流原始林」をはじめとした自然林(天然林)が広がり、我が国最大規模のまとまりをもつ原生流域として特記されます。」		御意見を踏まえ、以下のとおり修正します。 「広大な山域には、国指定天然記念物「沙流川源流原始林」をはじめとした自然林(天然林)が広がり、我が国最大規模のまとまりをもつ原生流域として特筆されます。」
7	2. 価値・魅力	まず、この段落は、内容的に、次の段落に記述されている動物とともに、アイヌ文化の前の 3~4 段落目に位置づける方が本公園の自然の理解を容易にします。 また、この段落における植物の記述内容は、間違いが多いので、以下のように修正すべきです。「日高山脈北部では、最高峰である幌尻岳(標高 2,052m)をはじめ、1,900m を超える山々が連なり、稜線(風衝地)からカール地形(雪崩地や雪田など)に至る環境変化に応じて多様なお花畠(高山植物群落)が発達しています。山脈の中北部から南部にかけては 1,800m 台から 1,500~1,300m 台へ標高が低くなりますが、山頂・山稜の風衝地と雪崩地に高山植物群落が成立しています。日高山脈の高山植物相は、固有種ヒダカキンバイソウや隔離分布種ヒダカゲンゲなど、古い山の成り立ちや特異な地形・地質と関係して他山系とは異なる特徴が認められます。森林も多様であり、全域に広くダケカンバ林が発達するほか、中腹(亜高山帯)の亜寒帯性常緑針葉樹林と山麓(山地帯)の針広混交林、アポイ岳を含む南端部の山麓では、北海道では珍しいミツデカエデやアカシデなどが混生する冷温帯性落葉広葉樹林や針広混交林、さらにはキタゴヨウとアカエゾマツが混生するかんらん岩地と結びつ		御意見のとおり修正します。なお、No. 7 の御意見を踏まえて表現を見直し、「山の成り立ちが古いこと」を「山脈の成り立ち」に修正します。

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		いた針葉樹林が広がっています。」		
8	2. 値 値・魅力	<p>「地形・地質」の表現を次のように見直すことができないかご検討願います。</p> <p>案原文「山の成り立ちが古いことや特異な地形・地質を有する本公園では、～」</p> <p>修正案「山の成り立ちが古く特異な地質に発達した地形を有する本公園では、～」</p> <p>理由：日高山脈の形成史を考えるうえで地質と地形は分けて表現すべきと考えます。</p> <p>地質に関して学界では、プレート衝突から変成岩体の生成、初期の隆起が概ね25百万年前（地質学論集第47巻1997.1ほか）と認識されているようです。また、地理学界の特に第4紀学では、当山脈の「氷河地形」や「周氷河地形」の形成期が支笏、樽前などの火山灰テフラ等を用い研究されており（古いところでは、平川、小野、小疊など）、現在の地形は概ね1万から数千年前に成立したと考えられているようです。</p> <p>おそらく襟裳岬、アポイ岳や北日高カンラン岩体（額平岳）が地質イベントにより、山岳核心部のカール、ホルン、アレートなどが地形イベントにより造られたのだと思います。</p> <p>両者の形成年代は、明らかに千倍を超える時間軸により隔てられています。よって、文章表現として「地形・地質」を一からげに、「成立が古く」とくくることは、本国立公園が特筆すべき自然景観の形成史を表すには、いささかまとめすぎであり、現時点で確からしい適切な形成史の時間軸が表現できるよう修正案を提案します。</p> <p>なお、南紀熊野ジオパークの解説リーフレットで見た地形・地質の比喩として、ショートケーキの土台となるスポンジを焼き上げることが地質の形成で、スポンジをかたどつたり、生クリームでデコレーションすることが地形の形成という表現がされていました。となればイチゴが、たぶん植生です。</p>		有識者に確認した結果、当該地域の地形と地質は複雑に絡み合っていることから、「地形・地質」と記載して問題ないと判断し、原案のまとします。なお、表現を見直し、「山の成り立ちが古いこと」を「山脈の成り立ち」に修正します。
9	2. 値 値・魅力	日高山脈では、標高の高い北部を中心に氷食地形であるカール地形が認められます。しかし、ヨーロッパアルプスやロッキー山脈、あるいは日本アルプスなどに見られる、岩が露出し尖った山頂（ホルン）や鋸状に岩峰が並ぶ岩稜（アレート）は、現在の日高山脈では明瞭ではありません。		日高山脈襟裳十勝国立公園の公園計画書にある表現であり、国土地理院HPにも、幌尻岳や戸鳶

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		<p>せん。いまの日高山脈は山頂も山稜も密に植生に被われ、上記地域と自然景観が異なります。日高山脈は、過去には上記地域と同様にホルンやアレートが明瞭であったと推測されますが、現在は、自然景観としての氷食地形はカール(圈谷)が主体になっています。したがって、ホルンとアレートの使用は止めた方が良いと考えます。</p>		<p>別岳等にはホルンやアレートがあると記載されていることから、原案のままとします。 (参考)</p> <p><u>6. 氷河・周氷河作用による地形 国土地理院</u> (https://www.gsi.go.jp/kikaku/tenkei_hyoga.html#%E6%B0%B7%E9%A3%9F%E5%B0%96%E5%B3%B0)</p>
10	2. 價値・魅力	<p>「さらに、本公園外の地域からも雄大な山々が連なる素晴らしい景観を見ることが出来ます。」の部分については、十勝平野から見る屹立した日高山脈が延々とした連なる雄大な眺望は、日本の他の地域ではありませんといわれる所以で、このことを日高山脈の価値・魅力として強調した方が良いと思います。</p>		御意見を踏まえ、段落を分けます。
11	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項	<p>保護に関する事項の現状と課題に関する記述は、極めて不十分で間違いが多いので、まず、自然科学の各分野の専門家の指導を得て改めて書き直すべきと考えます。</p> <p>8頁の図2(日高山脈襟裳十勝国立公園 重要な生態系の分布図)では、凡例として、高山生態系(高山帯・亜高山帯植生)、森林生態系(3種類の天然林)、河川生態系(主要河川)、ならびに海浜生態系(自然海岸植生)の4生態系が図示されており、この生態系ごとに保護に関する事項が記述されています。しかし、図2に示された上記生態系区分は、自然科学的に見て大きな間違いとなるため、生態系ごとの記述においても間違いが多く生じています。</p> <p>まず、高山生態系は、一般に、森林限界を超えた植生(非森林植生)の領域に使用されています。しかし、図2では、高山生態系の凡例が高山帯・亜高山帯植生とされて</p>		御意見を踏まえ、図2を修正します。

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

	<p>いるため、山頂・山稜にある非森林植生(ハイマツ低木林や各種高山植物群落)だけではなく、山腹急斜面(亜高山帯)に広く発達するダケカンバ林を合わせて高山生態系と呼んでおります。植生生態学的にみると、日高山脈における高山生態系は、山頂・山稜・カール地形・沢の源頭部・かんらん岩地などに限られるため、それらの面積は図示よりかなり小面積になるのが実際です。このような高山生態系には、固有植物、隔離分布植物をはじめとする希少生物が集中していますので、日高山脈の生物多様性保全上、高山生態系は正しく示される必要があります。</p> <p>次に、日高山脈の森林生態系は、実際には、亜高山帯のダケカンバ林と常緑針葉樹林、山地帯の針広混交林と落葉広葉樹林から構成されています。図2における森林生態系は、山脈に広く発達するダケカンバ林を除外していますので、森林生態系が極めて不正確に示されています。日高山脈の亜高山帯以下に見られる森林生態系は、森林施業対象外であったダケカンバ林が原生林として広大な面積を占める点に大きな特徴があり、同様に施業対象外であった亜高山帯常緑針葉樹林の「沙流川源流原始林」やアポイ岳一帯のかんらん岩地における国指定特別天然記念物「アポイ岳高山植物群落」と天然記念物「幌満ゴヨウマツ自生地」の各森林が原生林として特記されます。</p> <p>図2は、森林施業対象とされる「天然林」の分布図を基本とし、それを生態学的に間違った凡例(4つの生態系)に当てはめて引用した点で、多くの間違いを生じさせています。図2では、森林施業対象外であるダケカンバ林が高山植物群落と一括され、天然林から除外されていたが、生態系分布図に間違って読み替えたことになります。</p> <p>林学・林業上の「天然林」は、植生生態学における「自然林(原生林を含む)」に概ね該当しますが、「二次林」も含み、「人工林(植林)」と対比されます。このことは、環境省による「植生自然度」の区分によって理解できます。植生生態学や人為の影響度合いを示す植生自然度の観点から、天然林ではなく自然林(天然林)と表現することが正しくなります。</p> <p>したがって、生態学から見て大きな間違いを含むので、図2の使用を止め、環境省作成の現存植生図と植生自然</p>	
--	---	--

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		<p>度図に代えるべきです。そこでは、高山帯・亜高山帯・山地帯の植生が区分されており、生態系区分に重要な資料になります。そのことによって、ビジョン案の間違いがはるかに減少すると判断します。</p> <p>ただし、環境省現存植生図は凡例が多いので、日高山脈全域の植生・生態系を正確かつ簡略に図示するためには、植生専門家の指導を得て、詳細凡例を包括的な凡例に括り直し、保護と利用に関する基本図として作成する必要があります。</p>		
12	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項・高山生態系	<p>高山生態系に関する記述は、南端のアポイ岳に重点が置かれ、日高山脈全域の特徴がほとんど記述されていません。高山生態系の多くは、山頂・山稜(風衝地)とカール地形(雪崩地と雪田)に発達しています。風衝地ではヒダカゲンゲ、ユキバヒゴタイなどの隔離分布植物、雪崩地ではヒダカキンバイソウなどの固有植物、雪田ではタカネクロスゲなどの隔離分布種が見られ、カール内の岩塊堆積地では氷期の生き残り(遺存種)であるエゾナキウサギが見られます。比較的狭い高山生態系に日高山脈の生物多様性を特徴づける希少生物が集中しています。このような比較的狭い高山生態系に登山道やキャンプ地が重なつており、またエゾシカの食害が高山植生に及んでいますので、保護と利用を考える前に、自然の現状を早々に把握する必要があります。希少生物や貴重な高山生態系における現状把握は、ビジョンに明記されるべき重要課題です。</p> <p>南端のアポイ岳周辺はもちろん特記されますので、その記述は残し、日高山脈全域の高山生態系について上記のような記述を加える必要があります。</p>	<p>御意見を踏まえ、 p.6、1行目以降の 文章を以下のように 修正します。</p> <p>「山脈の成り立ちや 特異な地形・地質に 関係して、比較的狭 い高山生態系には、 日高山脈の生物多 様性を特徴づける 固有種や隔離分布 種が多く生息・生育 します。</p> <p>高山生態系の多く は、山頂・山稜(風衝 地)とカール地形(雪 崩地と雪田)に発達 しています。風衝地 ではヒダカゲンゲ、 ユキバヒゴタイなど の隔離分布種、雪崩 地ではヒダカキンバ イソウなどの固有植 物、雪田ではタカネ クロスゲなどの隔離 分布種が見られま す。」</p>	
13	3. 現状と課題	本パラグラフは、よく読めばそうではないとわかるのですが、アポイ岳のみを取り扱っている印象を受けます。アポ	No.12、13の御意見を踏まえ、修正しま	

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

	(1)保護に関する事項 ・高山生態系	イ岳は、本国立公園の中でも特異な低標高地に高山生態系が成立していることに疑いはありません。7行目最後段「また、～」からが、アポイ岳以外の高山生態系を扱ったものと思いますが、他のエリアも触れていることがわかるよう修正をご検討願います。 (修正案) 「特にアポイ岳は、ヒダカソウなどの固有種や希少な隔離分布種が集中し、アポイ岳高山植物群落は国指定特別天然記念物に指定されています。また、国内では唯一のヒメチャマダラセセリの生息地です。」→「特にアポイ岳は、ヒダカソウなどの固有種や希少な隔離分布種が集中し、国指定特別天然記念物に指定されているアポイ岳高山植物群落は、国内で唯一のヒメチャマダラセセリの生息地でもあります。」		す。
14	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・高山生態系	「地形・地質」の表現を次のように見直すことができないかご検討願います。理由は4項 24 行目と同様です。 案原文「日高山脈には、 <u>成り立ちが古く特異な地形・地質</u> があり、固有種や隔離分布種が多く生育します。 修正案「日高山脈には、 <u>成り立ちが古く特異な地質に発達した地形</u> があり、固有種や隔離分布種が多く生育します。」		No.12 の修正に合わせ、以下のように修正します。 「山脈の成り立ちや特異な地形・地質と関係して、」
15	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・高山生態系	「希少」は、あえて使用しなくてもよいと思料します。5行目で希少植物の例示として「ヒダカソウ」があがっていることと、再度ヒダカソウを「希少」とすることで、よからぬ考えを持つ方々が、ことさらヒダカソウを注目するおそれが高まると考えています。「希少」に関しては、この箇所で例示していますが、他の項や段落に共通の意見です。 (修正案) 「しかし、ヒダカソウなどの希少植物は度々盗掘の被害を受け、大きく個体数が減りました。」→「しかし、ヒダカソウなどの植物は度々盗掘の被害を受け、大きく個体数が減りました。」「…によっても、希少種の生育基盤が脅かされています。」→「…によっても、貴重な高山生態系の基盤が脅かされています。」		御意見のとおり修正します。
16	3. 現状と課題 (1)保護	「保護団体」を「市民団体」とするよう検討できないでしょうか。ここにあげられた活動は、山岳会、北海道自然保護協会、山トイレの会など具体的なプレーヤーがあるものが		御意見のとおり修正します。

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

	に関する事項 ・高山生態系	上がっていると思います。十勝や日高地域の関係者とくに各種の現場レベルではしばしば保護と対立する構図がこれまで多くあり、「保護」という語感が、中々に強い負の印象を与えます。今後本ビジョンによる活動が、地域へ浸透していくことを目指すのであれば、「市民団体」といった「行政によらず自発的に活動する集団」という意味合いにするほうがビジョンの浸透や進行上は、望ましく思えます。 (修正案) 「一方で、保護団体による…」→「一方で、市民団体による…」	
17	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・森林生態系	「日高山脈は広大な森林を擁し、原生的な森林も見られます。森林にも多様なタイプがあり、針広混交林のほか、北部には亜寒帯性の針葉樹林、南西部には冷温帯性の落葉広葉樹林、またアポイ岳一帯のかんらん岩地帶にはキタゴヨウとアカエゾマツを主体とする針葉樹林が広がっています。」この表現は、曖昧であり、間違いを含んでいますので、以下の文案に代えていただきたい。 「日高山脈は広大な森林生態系を擁しており、多様な群落タイプが認められます。そのうち、全域にわたって急峻な山腹斜面に発達するダケカンバ林、保護地域である北部沙流川源流域の亜高山帯(亜寒帯)常緑針葉樹林、ならびに南端部アポイ岳周辺かんらん岩地のキタゴヨウ・アカエゾマツ林は、それぞれ原生林として特記されます。そのほか、全域の亜高山帯(亜寒帯)常緑針葉樹林と、山地帯(冷温帯)の針広混交林と落葉広葉樹林という、道内に普通な森林も自然林(天然林)として広がっています。	御意見を踏まえ、以下のとおり修正します。 「日高山脈は広大な森林生態系を擁しており、多様な群落タイプが認められます。そのうち、全域にわたって急峻な山腹斜面に発達するダケカンバ林、保護地域である北部沙流川源流域の亜高山帯(亜寒帯)常緑針葉樹林、アポイ岳周辺にあるかんらん岩地のキタゴヨウ・アカエゾマツ林は、それぞれ原生林として特記されます。そのほか、全域にわたり亜高山帯(亜寒帯)には常緑針葉樹林、山地帯(冷温帯)の針広混交林や落葉広葉樹林が植生自然度の高い状態で分布していま

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

			す。」
18	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・森林生態系	「山地の岩場には氷河期の生き残りと言われるエゾナキウサギが生息しています。」について、以下の理由から修正が必要です。エゾナキウサギは、七つ沼カールなど高山生態系の岩塊堆積地に生息しており、一方で、山腹～山麓(亜高山帯～山地帯)の風穴地(岩塊堆積地)にも見られます。このような分布は、大雪山の高山帯と大雪山東麓(十勝～北見地方)の風穴地にわたる分布と似ています。したがって、以下の修正を願います。「七つ沼カールなど高山生態系に生息する氷期の生き残りと言われるエゾナキウサギは、札内川流域や猿留川流域など低標高の風穴地にも点在して生息しています。」なお、岩場は崖地と岩塊堆積地を含みますが、エゾナキウサギ生息地は崖地ではありませんので、岩塊堆積地と記すべきでしょう。	原案の「山地の岩場」は不正確と理解し、他方、ご提示の生息地の情報を具体的に記載することは保護の観点から懸念があるため、生息環境は記載しないものとす。
19	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・河川生態系	<p>河川生態系の記述において、魚類や水生昆虫の内容が記述されていません。このことは、河川生態系の生物主体を書かないので、よろしくないと思います。山脉のサケ科魚類には、アメマスのような降海魚、オショロコマのような陸封魚、移入されたニジマスなどが認められ、地球温暖化との関係からオショロコマが源流域に閉じ込められ、さらに減少することが危惧されています。このような現状が書かるべきであり、河川生態系の課題は、他の生態系にもつながりますが、まずは現状把握から保護と利用を考える観点を明記すべきと考えます。</p> <p>なお、ヤシャゼンマイやアポイタヌキランは河川沿いで時に冠水する生育地にある渓流植物ですが、エゾトウウチソウとソラチコザクラは必ずしも河川と結びつかない湿った崖地の植物ですので、河川生態系の中で記述することに違和感が生じます。後の2種は省略すべきです。</p> <p>なお、ケショウヤナギのような氾濫による搅乱が多い河床、その周辺の河岸段丘面に成立するドロヤナギ林など、河床林・河畔林が河川生態系の中で述べてよいのか、あるいは森林生態系ではないか、再確認する必要があると思います。</p> <p>生態系として記述するのであれば、水生昆虫・魚類・シマフクロウ・キタキツネ・エゾヒグマなど生き物のつながり(食物連鎖)について、簡単であっても触れるべき思います。</p>	<p>御意見を踏まえ、修正します。</p> <p>なお、河川が生み出す環境(岩場や渓畔)に成立する生態系についても含めた記述としているので、2、3段落目の御意見については、原案のままとします。</p>

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

20	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・河川生態系	「河川生態系も～」→「河川生態系が～」とするほうがよいと思います。文意として、前段「森林生態系」の大きな広がりから河川との関連性が在る部分に限定し、助詞「も」を使われたと思いますが、本書の読み手からは、単に豊かな河川生態系が日高山脈にあることが理解できれば良いので、格助詞「が」の使用で足るものと思います。		御意見のとおり修正します。
21	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・河川生態系	「するため <u>は</u> ～」→「するため <u>に</u> (には)～」とするほうがよい。「には」の単純な記載ミスかと思われます。意味合いとして、「に」も「には」もいずれでも通ずると思いますので、修正ご検討のほどお願いします。		御意見のとおり修正します。
22	3. 現状と課題 (1)保護に関する事項 ・海浜や海洋の生態系	図2では海浜生態系(自然海岸植生)と図示されており、本文では海洋生態系として沿岸生態系の内容が記述されています。これらの混乱は誤解を招きますので、整理された記述に推敲していただきたい。		御意見を踏まえ、図2を修正します。
23	3. 現状と課題 (2)利用に関する事項 ・登山利用等 図3： 日高山脈襟裳十勝国立公園 主要な路線・施設の分布図	図3の主要路線には、以下の歩道(登山道)が示されています。山脈の南から北に向かって、豊似湖・猿留山道・豊似岳、様似山道・アポイ岳～ピンネシリ、楽古岳(西尾根)、神威岳、ペテガリ岳、コイカクシュ札内岳・ヤオロマップ岳・1839峰、カムイエクウチカウシ山、イドンナップ岳、十勝幌尻岳、幌尻岳・戸鳶別岳・ピパイロ岳、チロロ岳、剣岳、芽室岳および日勝峠・ペケレベツ岳です。 このうち、山脈北部の最高峰幌尻岳周辺や中部のペテガリ岳や神威岳、および南部の楽古岳、アポイ岳、豊似岳などへの登山道以外には国土地理院地図(2万5000分の1)において歩道(幅員1m以下)として表示されているものはありません。山稜上にある登山道も登山道として整備されたものではなく、昔からの登山者の歩行によって自然発生的にできたものである。このように、日高山脈の登山道は、地元の登山関係者により整備されている一部の登山道を除き、登山道として管理されているもの		記載されている路線は、すでに日高山脈襟裳十勝国立公園の公園計画に定める道路(歩道)を示すものであり、原案のままとします。

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		<p>は少ないです。例えば、カムイエクウチカウシ山の登山道は札内川八ノ沢沿いの踏み跡、そして上部では沢そのものであり、特にコイカクシュ札内岳山頂より南のヤオロマップ岳～1839峰間は登山道とは言えない踏み分けに過ぎません。したがって、国土地理院地図(2万5000分の1)に歩道(幅員1m以下)として表示されていないルートについては、安全確保と希少種・希少群落の保護の観点から、保護と利用のゾーニングが検討されていない現段階では、図3の歩道から除外すべきと考えます。もちろん、既存のルートについても安全確保と希少種・希少群落の保護の観点から再検討することは言うまでもありません。</p> <p>全般に、日高山脈の登山道は、多くが山頂・山稜上やカール内で希少種を含む高山植物群落の中に設けられており、これまで登山者が設置してきたキャンプ地も諸処に認められます。したがって、希少種と希少植物群落の保護の観点から、慎重な現状把握が必要です。その上で、管理すべき登山道の設定や利用の程度を検討すべきと考えます。こうした登山道は、長い間、多数の登山者が利用してきた明瞭な歩道(国土地理院地図に示されている登山道)とは異なりますので、上記のような現状把握と慎重な検討を行わずに、ビジョン案に明示することには強く反対いたします。</p>	
24	3.現状と課題 (2)利用に関する事項	<p>(パブコメ案)また、高山植物の踏みつけ、 (意見) また、回復困難な稜線部やカールでの高山植物の踏みつけ、(文言の追加) (理由) 現状の課題をより明確にすることで、実効性の高い厳格な保護、適正な利用の推進に結びつけるため</p>	御意見のとおり修正します。
25	3.現状と課題 (2)利用に関する事項	<p>一定のマナーの周知や遵守が利用者各自の判断に委ねられることとなり、マナーの理解度が利用者によって温度差があるのでビジョン案で望んだような適切なマナー遵守がきちんとなされるのか疑問です。</p> <p>そうであるならば地元自治体および登山団体など幅広く日高山脈界隈で活動を行う利害関係者において、地域ルールを設定し、利用者に対して明確な指針を示すことが必要なのではないかと考えます。</p> <p>(修正案)</p> <p>「高山植物の踏み付け、野営による裸地化や、焚火の跡、</p>	御意見を踏まえ、以下のとおり修正します。 「高山植物の踏み付け、野営による裸地化や、焚火の跡、ゴミの投棄、トイレ跡などが確認されているため、 <u>地域ルールの設定</u> や一層のマナー等

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		ゴミの投棄、トイレ跡などが確認されているため、一定のマナー等の周知の取組とともに、登山者のマナー遵守が求められます。」→「高山植物の踏み付け、野営による裸地化や、焚火の跡、ゴミの投棄、トイレ跡などが確認されているため、地域ルールを設定した上で一定のマナー等の周知の取組とともに、登山者のマナー遵守が求められます。」		の周知の取組とともに、登山者の <u>ルール・マナー遵守</u> が求められます。」
26	3. 現状と課題 (2)利用に関する事項 ・眺望を生かした観光等	この中に、「山麓部における豊かな自然を活かした自然に対する学びや体験の場の提供」が記されております。このこと自体については、賢明な利用の観点から推進に賛成します。ただし、低標高の山麓においても希少種が見られ、低標高地の自然林が見られますので、人為の影響を与える場合には、その利用の程度や規模にかかわらず、自然の現状把握と影響評価をすると明記していただきたい。 上記の5頁4~5行目のところで指摘した、日本の他の地域ではあまりないと思われる十勝側の延々と連なる雄大な日高山脈の眺望を本公園の大きな特徴として強調すべきです。		オーバーユースの懸念、本公園外の地域からも雄大な山岳景観が一望できる点について触れているので、原案のままとします。なお、No.28の御意見も踏まえ、(3)管理運営体制に関する事項の欄に自然の現状把握と影響評価に関する記述を追記しました。
27	3. 現状と課題 (3)管理運営体制に関する事項 ・関係機関・関係団体・関係者等 (以下「関係者」という。)との連携	本公園の管理運営では、多くの方々が連携する体制が必要であることが記されています。このことは、後述している4. 基本理念(3)連携・協働の推進と、5. 国立公園としてのビジョン(あるべき姿、目指すべき将来像)(3)みんなで国立公園のことを考え、連携・協働して管理運営に取り組む国立公園において、繰り返し記述されています。関係者みんなで管理・運営を行う体制について、基本的には賛成します。 しかし、保護と利用に関わる国立公園地域の自然の現状把握を担う体制についてはまったく触れられていません。日高山脈は、峻険な地形と管理された登山道が少ない状況に現れている原生的自然の広がりに大きな特徴があります。このことは、自然科学的研究が容易に進まない現状につながり、世界自然遺産に指定されている知床半島によく似ています。日高山脈の自然に関する既存研究には、重要なものが少なくありませんが、定期的な自然の現状把握がなされているとは言えない状況が続いております。本公園のビジョン(パブコメ版)も、近年の現状把握に		科学者を関係者に含むことを排してはおりません。事務局によるヒアリングの実施、協議会へのアドバイザーとしての招へいなどにより、必要に応じて意見を聞くものとします。

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		<p>基づいているとは決して言えません。</p> <p>したがって、山脈の自然を知る研究者の組織を設置する必要があります。知床世界自然遺産における科学委員会と同様な組織を、上記「関係者」の中に位置づけ、その中で本公園の保護と利用の兼ね合い、登山道やキャンプ地の在り方、保護と利用のゾーニングなどについて、まずは科学的に検討することが極めて重要と考えます。次に書かれている利用プログラムの充実も重要ですが、保護と利用の兼ね合いを判断できる保護プログラムの充実もまた本公園の大きな目的になりますので、その組織を「関係者」の中に位置づけるべきです。</p>	
28	3. 現状と課題 (3)管理運営体制に関する事項 ・利用施設・拠点・体験プログラムの充実 ・自然・歴史・文化の学習のための人材・ソフトの充実	<p>これらは、本公園の利用に関して、重要な項目と考えます。しかしながら、広大な山麓(山地帯ないし亜高山帯)における利用と、とりわけ貴重な山頂・山稜(高山生態系)における利用とは区別した保護・利用計画が必要です。いずれにおいても自然に悪影響を及ぼさない利用の方法を考えていく必要があります。本公園の賢明な利用に関して、それぞれの自然の現状把握から始まり、自然の特徴の周知・自然教育と実際の保護管理に至る体制を用意する必要があります。</p> <p>例えば、山麓における自然を把握し、自然教育に反映させる仕組み、自然ガイドの充実が求められ、他方で、高山生態系における自然の現状を把握し、賢明な利用を考える体制を構築していただきたいと考えます。そうした内容の記述をぜひ加えていただきたいと考えます。</p>	御意見を踏まえて、以下のとおり追記します。 「自然環境モニタリング等により負荷の度合いを把握し、必要に応じて改善する仕組みを取り入れたり、」
29	4. 基本理念 (2)適正な利用の推進	<p>(パブコメ案)山や海への畏敬の念をもって行動し、 (意見) 山、森、川、海への畏敬の念をもって行動し、 (文言の追加) (理由)</p> <p>パブコメ案の「山」のイメージが漠然とし人によって捉え方が異なるため、「山」に包括されがちな森林と河川の位置付けと重要性を明確にするため</p>	御意見のとおり修正します。

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)への御意見及びそれに対する考え方について

		<p>本公園は原生的な森林と河川を有すること</p> <p>本公園の原生的な自然や豊かな生物多様性は、森林と河川が深く関わっていること</p> <p>本公演の独特の生態系や景観の連続性は、森林と河川が深く関わっていること</p> <p>アイヌの信仰や祈りでは、森の神、川の神を重要視しそれぞれ敬っていること</p>		
30	4. 基本理念 5. 国立公園としてのビジョン(あるべき姿、目指すべき将来像)	<p>標記の基本理念とビジョンに関して、それぞれ(1)自然環境の厳正な保護と(1)原生的な自然とその恵み、後世まで守り伝えていく国立公園、(2)適正な利用の推進と(2)利用者のレベルに応じた楽しみ方があり、自然体験の質が確保されている国立公園、そして(3)連携・協働の推進と(3)みんなで国立公園のことを考え、連携・協働して管理運営に取り組む国立公園と記されています。以上は、非常に重要な項目として、賛同できます。</p> <p>しかし、既に述べたように、原生的な自然の広がりに特徴がある本公園において、保護と利用のバランスを科学的に検討する必要があります。そのため、知床世界自然遺産における科学委員会的な研究者組織を設置し、多くの国民と道民の方々と連携する体制を重視すべきと考えます。上記のそれぞれの(3)にそのことが明記されることが肝心と考えます。</p>		科学者を関係者に含むことを排してはおりません。事務局によるヒアリングの実施、協議会へのアドバイザーとしての招へいなどにより、必要に応じて意見を聞くものとします。
31	参照文献	参考文献に、行政委託の各種報告書が多く見られます が、基礎とすべき研究論文、特に最近の文献があまりない ようです。「地質に関する総合的な文献」では、日本地質学会(編集)「日本地方地質誌 1 北海道地方」(朝倉書店)など最近の総合的な文献を参考されることを望みます。また、動植物の文献に関しては、ビジョンに挙げられた項目ごとに多数の文献が引用されており、それらの文献に目を通されていないためにビジョン案に間違いが生じたと考えます。このことは、日高山脈の自然に関して保護と利用を考える上で基礎となる参考文献の引用が不十分であること、そして自然科学研究者の参加がビジョン案作成段階でも必要なことを示しております。		御意見を踏まえ、参考とする文献を増やし、内容の事実確認及び修正を行うとともに、今後ビジョンに基づき具体的な取組を検討していくにあたっての参考とさせていただきます。